

タイトル 追憶の消失点
Vanishing Point of Recollection

組写真のテーマの説明 いわゆる京町家は昭和25年以前に建てられた伝統的木造建築で、職人や商人のための職住一体住宅として、数世代にわたって継承されてきた。近年、伝統産業の衰退と核家族化に加え、老朽化による維持費用の増大、固定資産税、相続税などの負担がネックとなり、後継者がなく、年間800軒、1日あたり2軒が取り壊されている。

京町家は「うなぎの寝床」と呼ばれるように、通りに面して、隙間なく狭い間口を連ねており、解体された後もその痕跡が両隣の建物の壁に残る。左右二つの痕跡のパースペクティブは、かつてそこにあった人々の営みをしのばせつつ、無限遠へと収斂する。

行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。
よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとゞまることなし。
世の中にある人とすみかと、またかくの如し。

鴨長明「方丈記」

制作の動機 私は学生時代以来、京都に在住しているとはいえ、しょせんは神戸生まれのよそ者である。伝統的な京都の町並みの風情が失われ、無粋な姿を晒していることにあまり抵抗感がない。人も町も、生きておればこそ、時に醜態を晒すことは必定だ。むしろ、インバウンド需要を狙って、厚化粧をほどこし、テーマパーク（見世物）化することに、親の遺産を食いつぶしているような、浅ましさを感じる。このことが昨今のコロナ禍により露呈したことは言うまでもない。平安京以来の時の流れの中で人々の営みが重なり、そのレイヤーのところどころが綻びて、あたかも「研ぎ出し模様」を呈している。そんなところが、僕にとってこの町の魅力なのだ。変貌を繰り返すこの町の断片を撮影するにあたって、ドイツの写真家ベッヒャー夫妻の仕事が頭をよぎった。夫妻に習い、これらの痕跡を可能な限り叙情性を排し、類型学的手法で記録したいと思っている。

追憶の消失点 #01



追憶の消失点 #02



追憶の消失点 #03



追憶の消失点 #04



追憶の消失点 #05



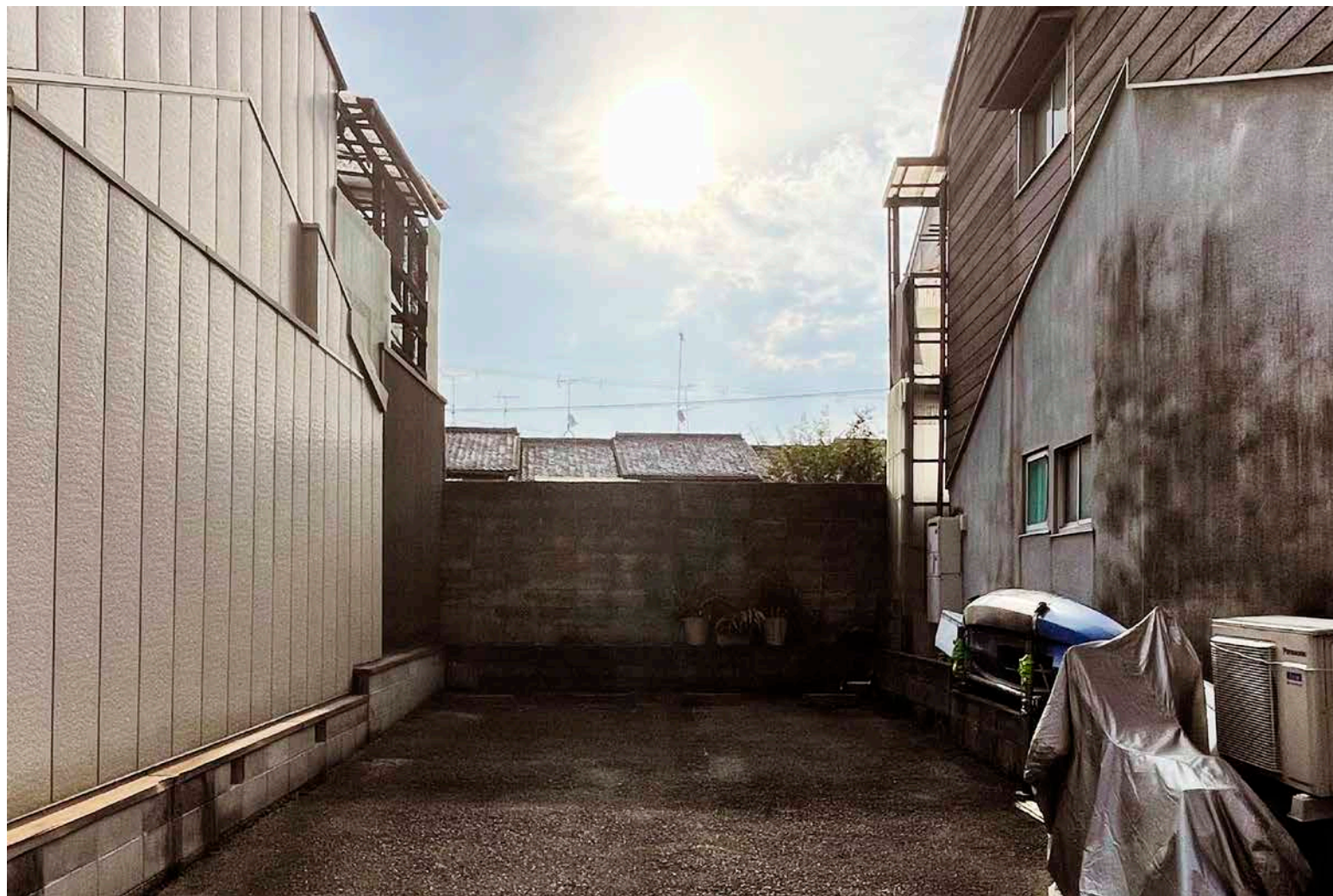
追憶の消失点 #06



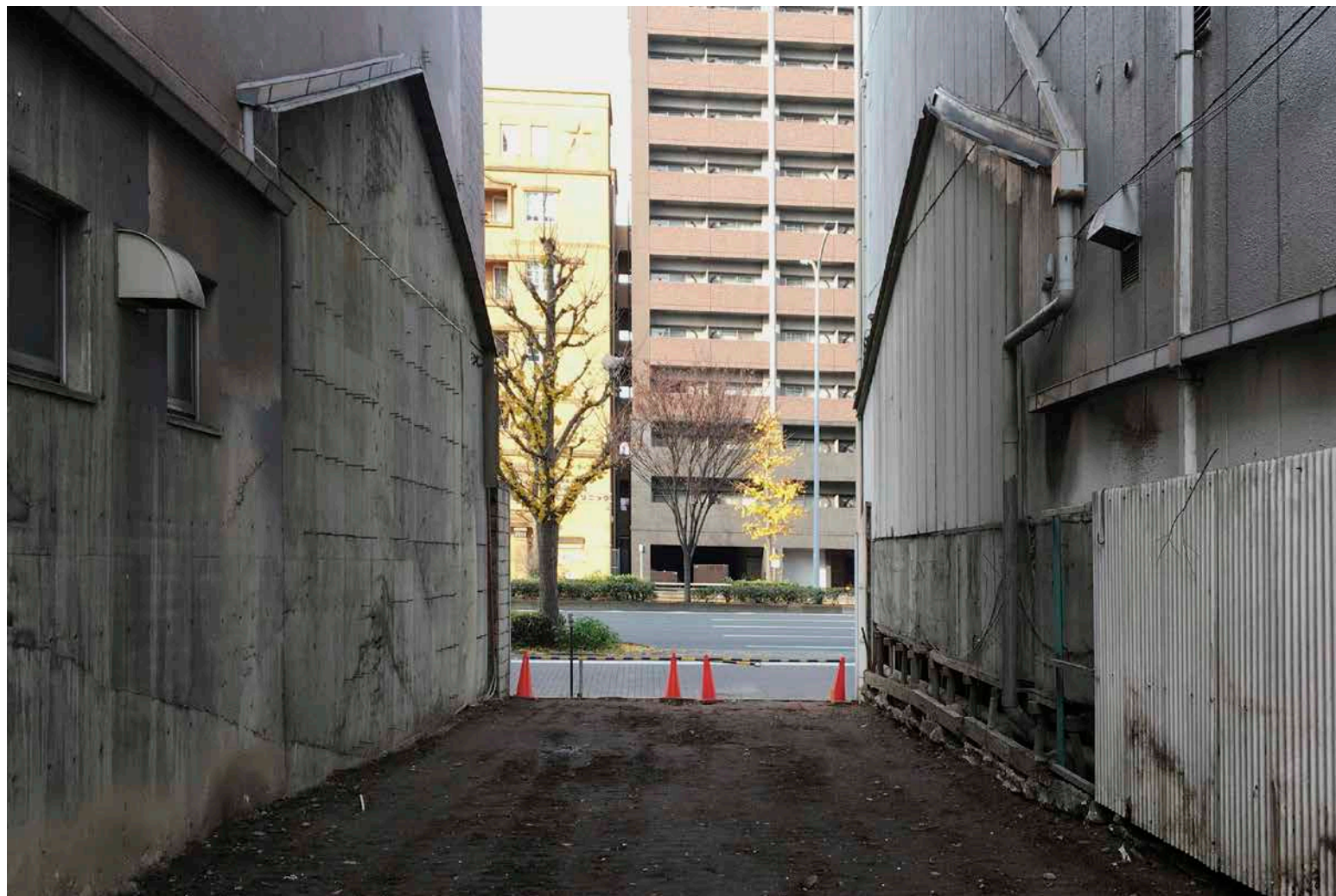
追憶の消失点 #07



追憶の消失点 #08



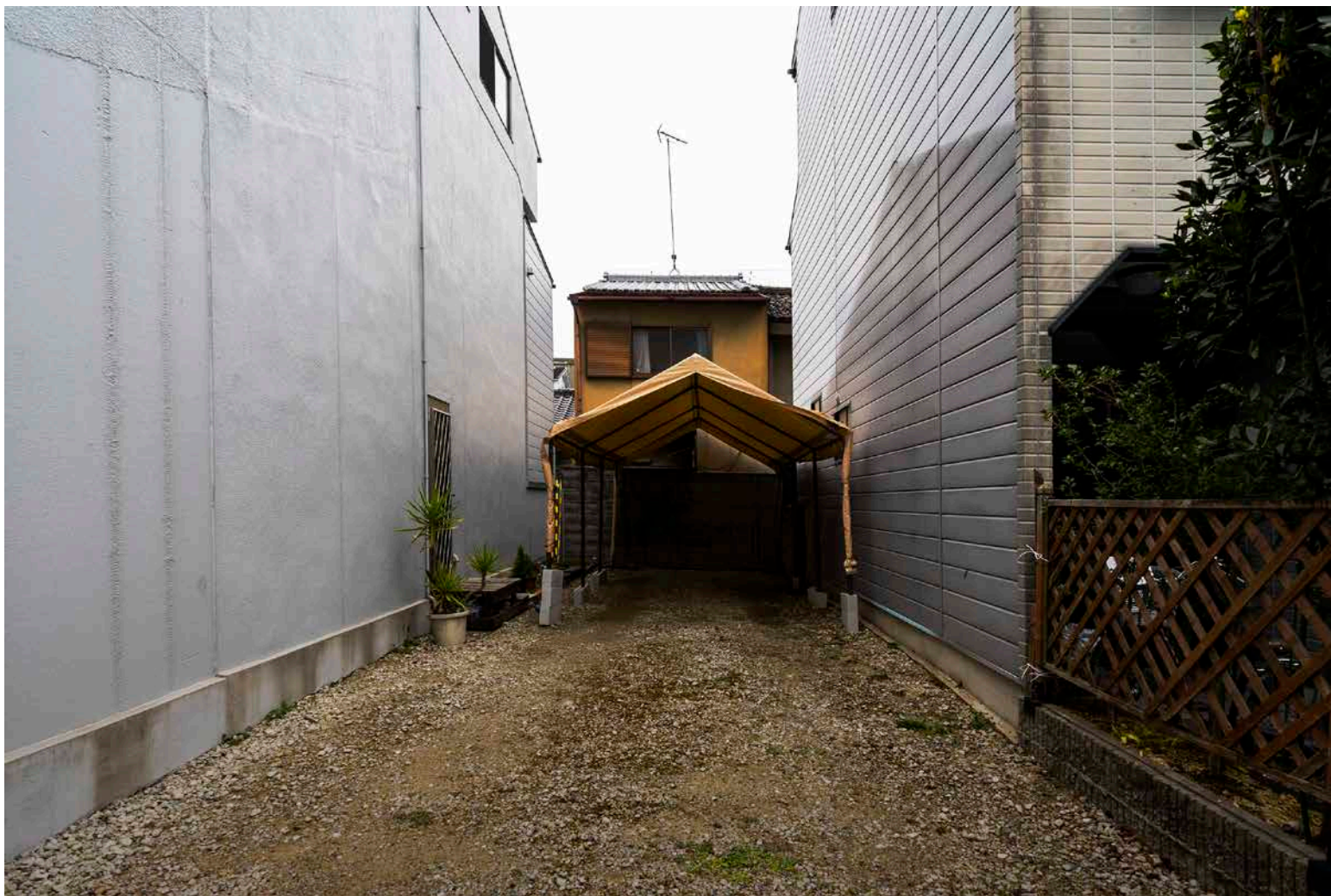
追憶の消失点 #09



追憶の消失点 #11



追憶の消失点 #12



追憶の消失点 #13



追憶の消失点 #14



追憶の消失点 #15



2022/08/30 09:20
京都市中京区西方寺町10
IMG_2040.jpg

三宅 章介

MIYAKE Akiyoshi



自己紹介 私は学生運動が失速しはじめた 1970年に京都市立芸術大学に入学した。
入学後間もなく、「東京ビエンナーレ '70 - 人間と物質」(中原佑介コミッショナー)に衝撃を受けた。そこには絵画も彫刻もなかった。
個の内面世界の表出としての造形表現がすっかり色褪せて見え、コンセプチュアル・アートに惹かれた。
とはいえ「もの派」の禅問答にはなじめなかった私は、半世紀を経た今もメディアの記号作用をパラドキシカルに露わにする試みを続けている。

経歴 1950 神戸市生まれ
1976 京都市立芸術大学美術専攻科修了

個展

1974,75,77,79,80,81,83,88,2018	galerie 16他
2018-20 Typology for Traces of GableRoofs	LUMENGallery
2021 Typology for Traces of Gable Roofs	京都写真美術館
「反復と差異」萩原朔美 x 三宅章介	LUMENGallery

グループ展

1972,89,90,95	OURWORKS展	大阪現代美術センター他
2017	三宅章介 x 藤本秀樹 / 1974→2017	京都嵯峨芸術大学
2017-22	京都写真展 GalleryMaronie	

公募展

1997	大阪トリエンナーレ 1997
1998,99	現代日本美術展
2000	クラコウ国際版画トリエンナーレ

受賞

1997	プリント 21 グランプリ展	準グランプリ
1998	京都美術工芸展	優秀賞
1999	京展	京展賞
2000	さっぽろ国際版画ビエンナーレ	Q氏賞

連絡先 080-4398-1021
miyake23@mbox.kyoto-inet.or.jp

web サイト www.akiyoshi.jp